

太宰府の文華く公文書館だより 142

近世紀行にみる太宰府

『太宰府紀行』

ページID: 7241

『太宰府紀行』は、石見国（現・島根県）津和野から太宰府への旅を記録した、寛政8（1796）年の紀行文です。作者の氏名は記されず、詳細は不明です。ただ、記述の端々から、津和野の富裕な商家の人ではなかったかと想像されます。

津和野を出発したのは9月8日で、太宰府到着は18日。すぐに天満宮に参詣し、延寿王院役僧の案内で境内を見廻っています。太宰府には二泊して、光明寺、観世音寺、戒壇院、都府楼跡、武蔵温泉を観光しました。帰路では、櫛田神社、箱崎宮、香椎宮に立ち寄りながら、27日に津和野に帰着しました。

『太宰府紀行』の特徴は、具体的に詳細な道中の記述です。往路では飯塚の先で長崎街道を離れ、米ノ山峠を越える昔の官道を通って太宰府に入りますが、他の紀行では省略される途中の小村や小道についても丁寧に記しています。「長尾（現・飯塚市）と云町有り。此町尻を直に行ば長崎道なるゆへ、右の方山添の小道を行く。田中の細道を経、半里ほ

どたどりて山口（現・飯塚市）と云村有り」。この山口村から分け入る峠についても「則ち太宰府道、米の山越也。米の山は山口より一里程上りて峠あり、それより二里計下りて太宰府なり。此峠より十余丁も下れば、柚須原（現・筑紫野市）と云村有り。此所より宝満山への道有り」と具体的にです。

他にも、太宰府天満宮で求めたお守りの種類やその初穂料、旅中宿泊した宿の主人の名、船番所での手続きなど、作者が関心を抱いたことについて細かく記しています。

一方で、これが単なる旅の備忘録ではなく紀行文として成立しているのは、折々に挿入される発句の効果でしょう。夜の天満宮で「心澄る宮居や月も影高し」と句を詠む作者の姿に、しみじみとした旅情を感じることができます。

古典の文句に頼らず、経験し感じたことを作者自身の言葉で記しているからこそ、作品に生き生きとした魅力が生まれているのです。その実用性と文学性の絶妙なバランス感覚は、作者の人となりや個性を示すものだと思います。